

# *CINEX Web Journal*



## 第 3 号

発行日 2017 年 12 月 1 日

- |  |       |
|--|-------|
| ★ 「書くこと」によるコミュニケーション力の育成<br>～Conversation Journal の活用～ | 稀代 嘉規 |
| ★ グローバル人材育成を再考する                                       | 小川 勤  |
| ★ ICT 化で変わる異文化適応曲線                                     | 荒尾 浩子 |

## 「書くこと」によるコミュニケーション力の育成 ～Conversation Journal の活用～

鎌ヶ谷市立第三中学校 教頭 稀代嘉規

「口頭での英語表現だけでなく、書くことによって表現力を身につけさせるには、ど

うしたらよいだろうか」これは、異文化情報ネクサス研究会第2回年次大会で「Warm-up 時の工夫」を発表させてもらった頃、書くことによってコミュニケーション力を高める方法を考えていた時でもあったのです。

その当時、私は、鎌ヶ谷市立第五中学校で英語を担当していました。ALT である Kate から Conversation Journal という書くことを通してコミュニケーション力を高める方法を知り、授業で使ってみることにしたのです。

Conversation Journal の目的は、口頭によるコミュニケーション力だけでなく、「書くこと」によるコミュニケーション力を身につけ、表現力をさらに高めていくことです。中学校1年次の後期で口頭である程度、表現できるようになった時期に導入するのが適当です。これは、ALT からの発想ですが、今までも定期試験の中で表現力を図るため設問の中に組み入れる教員も多かったのも事実です。

成果としては、生徒一人ひとりが何を書こうかと考えるようになり、意欲的になったことです。また、この英作文を通して表現意欲が高まり、個人差はありますが、語彙が増え、書くことによる表現力が以前より高まったことです。併せて ALT が生徒一人ひとりと書くことを通してコミュニケーションを積極的に取ることになったことです。一方、課題としては、ある程度、英作文の力がないと、書けないということです。

今後の展望として、次のように応用・発展できるのではないかと考えています。このアイデアは、中学校での実践ですが、大学という教育現場を想定するとしたら、ゼミ担当の先生と SNS を活用し、学生との間で英文でのレポート等に関して指導・助言を受ける際に英語でコミュニケーションを図る方法が考えられるのではないかと思います。

## グローバル人材育成を再考する

山口大学 教授 小川勤

平成29年3月上旬にタイ国のチェンマイにあるチェンマイ大学（以下、CMU）を訪問した。訪問理由は CMU の国際戦略、特にグローバル人材育成のための教育プログラムを研究するためである。CMU における国際戦略は、2017年現在、8つの学部がインター

ナショナルプログラムをそれぞれ開発し、主に留学生を対象として提供している。また、タイ文化を理解するプログラムも充実している。授業は基本的に英語で行われる。受講生に対しては最低限の英語能力（外部の英語能力試験等で挙証された能力）を満たしていることが当該プログラムを受講できる条件となっている。また、CMU の学生もこの英語能力を満たせばインターナショナルプログラムを受講できることになっている。

一方、同じ3月末に私が関係する国際交流関係の研究会において、ある大手メーカーで欧州駐在員を経験された方に異文化体験や駐在国でのビジネスの進め方、さらにグローバル人材の育成などをテーマにした講演を聞く機会に恵まれた。この講演からグローバル人材とは、「外国と日本の双方を知った人間」であり、「その知識を使って役立てられる人間」と理解することができた。また、グローバル人材の基本として、「日本の文化、歴史、社会、経済などを端的に英語で説明できること」の重要性や、「逆境に耐えうる胆力」や「環境に応じたマネジメント能力」などの資質が必要だと感じた。

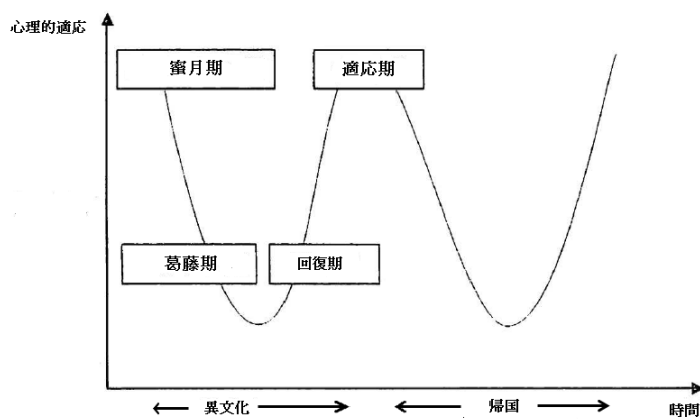
これらの体験から、日本の大学では英会話能力の育成を重視しすぎないか。英会話能力とともに、「逆境に耐えうる胆力」や「圧倒的な文化の違いに対応し、現地人の文化に合わせて課題を解決していける能力」が実はより重要ではないかと考え直すようになった。企業におけるグローバル人材とは海外諸国と日本とを結び付ける「ブリッジ・パーソン」になることであり、「企業理念とビジネス手法を現地社員に浸透させることができる人材」になることである。日本の大学等が現在熱心に行っているグローバル人材の育成プログラムが果たしてこれらに合致した教育プログラムになっているか、もう一度考え直す必要があると感じた。

## ICT 化で変わる異文化適応曲線

三重大学 教授 荒尾浩子

「やっぱり顔を見て話さないと寂しいですね」。10年ほど前に、アメリカ留学中の学生を筆者が訪問した際、彼女の言ったことばである。大学の寮生活をしながら学び、そろそろ4か月が経つ頃であった。アメリカ人の友人もでき、うまく適応している様子に胸を

なでおろした。一方で「でも夜、部屋に戻ると急に寂しくなる」と呟いた。頷く筆者に「だから毎日、これでお母さんと話しています」と自室のパソコン脇からマイクを出して見せた。「毎日、話せるのに、何が寂しいの？私が留学した時はスカイプなんてなかったんだから」と声を上げた。そして彼女の冒頭のことばであった。いやいや、顔を見るのはおろか、メールさえなく、手紙は 5 日かかり、国際電話は高額で要件を伝えるのが関の山の時代であった。



異文化コミュニケーションの分野に「異文化適応 W 曲線」という理論がある。異文化適応の心理的な変化を図式化したものだ。研究者により多少異なるが、概ね次のような変化を表している。1. 蜜月期、2. 葛藤期、3. 回復期、4. 適応期である。

授業で、この図を説明するが、学生は今一ピンと来ていない様子である。筆者自身が一昔前にアメリカ留学で経験した「葛藤期」を、自嘲的に話してみる。アメリカ生活の不満を日本人の集まりで愚痴った時の開放感。かりんとうが、無性に食べたくなり、1 時間半、日本食品店まで猛然と自転車をこいだこと。彼らは、笑って聞いているが、どのくらい合点がいくのだろうか。

先述の留学生訪問から、さらに 10 年が経った。人々はスマートフォンを持ち歩き、Wi-Fi さえ繋がれば、自室どころか、道端でも、顔を見ながら、外国の人と話ができる。ICT の発達で海外は心理的にぐっと身近になった。W 曲線の第一の窪みの「葛藤期」は、異文化との出会いでは不可避だが、今やさほど大きな窪みではないのかもしれない。緩やかなカーブを描き、すぐに「回復期」を迎えている可能性があるだろう。